



斎藤 博明

副代表幹事
格差を考える委員会 委員長

TAC 取締役社長

私は起業してからずっと、体に無理を強いて仕事をしていた。そのため、40歳くらいでカロリーと死ぬだろうと思いついていた。ところが、40歳を過ぎて生きていた。これには驚いた。その代わりに、以前ならどんなに酔っ払っても自宅へたどり着いたのに、帰れなくなった。健康診断を受けると、不整脈があり、尿からは蛋白が出て、肝臓の数値は悪く、血圧は驚くほど高かった。私は人生を短距離走のイメージで駆けてきた。診断結果を見て、人生を長期の視点で再構築しようと思った。新たな価値として健康を加えると、ジョギングを開始した。

それから1年後、私は初めてのマラソン大会に出場した。ホノルルであった。早朝5時、アラモアナ公園は3万4000名ものランナーで埋め尽くされていた。暗い夜空に花火が打ち上げられた。出発の合図だ。ダイヤモンドヘッドを登る頃、ようやく太陽が海に昇った。朝日を浴びながら坂を登った。その日は異常な高温に見舞われた。12月なのに日中の最

高気温は31度まで上昇し、太陽がランナーに照りつけた。

35キロ地点で私の前を走っていたランナーが脱水症状で倒れた。私も暑さで頭が朦朧とした。「私は今、何をしているのだろうか？」と不思議でならなかった。「もう止めよう」と、私を弱い心が襲った。足が止まった。その時だった。沿道にいた女性が私を大声で激励した。「You can do it! (君ならできる)」。私は漸く我に返った。沿道の人々が口々に「You can do it!」と叫んでいた。私は勇気を奮い起こして、初マラソンを完走することができた。どんなに遅くても、米国では挑戦する人を讃えた。

私はマラソンの面白さに目覚め、次々と大会に出場した。だが、日本の大会では制限タイムが厳しく、ランナーは必死の形相で走っていた。制限タイム以下のランナーたちは邪魔物のように扱われ、収容バスに乗せられた。私は収容バスと競争しながら走った。日本は、遅い挑戦者に厳しい国だった。

Contents

巻頭言 斎藤博明	収容バスとの競争	001
特集・行動する経済同友会	同友会起業フォーラム2006、始動 「めざせ、起業大国ニッポン！—イノベーションは個と知の完全燃焼から—」	002
リレートーク 大平晃	バルト3国	010
小特集	リーダーシップ・プログラム 第2期 (2005年度) 活動レポート 「リーダーシップのエッセンスとは何か」	011
委員長インタビュー	欧州委員会 小枝至	016
経済同友会最前線	駐日米国大使 J・トーマス・シーファー氏講演 他	017
おくやみ	河合三良元副代表幹事・専務理事を偲んで	022
同友会スケッチ	2006年10月の記録と12月の予定	023
新入会員紹介	2006年10月20日現在の入退会者	025
私の思い出写真館 野村吉三郎	アーノルド・パーマー選手との思い出	026